

「パウロ暗殺の陰謀」

2016年09月09日

使徒言行録 23 章 12 節～22 節 夜が明けると、ユダヤ人たちは陰謀をたくらみ、パウロを殺すまでは飲み食いしないという誓いを立てた。このたくらみに加わった者は、四十人以上もいた。彼らは、祭司長たちや長老たちのところへ行って、こう言った。「わたしたちは、パウロを殺すまでは何も食べないと、固く誓いました。ですから今、パウロについてもっと詳しく調べるといふ口実を設けて、彼をあなたがたのところへ連れて来るように、最高法院と組んで千人隊長に願い出てください。わたしたちは、彼がここへ来る前に殺してしまう手はずを整えています。」しかし、この陰謀をパウロの姉妹の子が聞き込み、兵営の中に入って来て、パウロに知らせた。それで、パウロは百人隊長の一人を呼んで言った。「この若者を千人隊長のところへ連れて行ってください。何か知らせることがあるそうです。」そこで百人隊長は、若者を千人隊長のもとに連れて行き、こう言った。「囚人パウロがわたしを呼んで、この若者をこちらに連れて来るようにと頼みました。何か話したいことがあるそうです。」千人隊長は、若者の手を取って人のいない所へ行き、「知らせたいことは何か」と尋ねた。若者は言った。「ユダヤ人たちは、パウロのことをもっと詳しく調べるといふ口実で、明日パウロを最高法院に連れて来るようにと、あなたに願い出ることに決めています。どうか、彼らの言いなりにならないでください。彼らのうち四十人以上が、パウロを殺すまでは飲み食いしないと誓い、陰謀をたくらんでいるのです。そして、今その手はずを整えて、御承諾を待っているのです。」そこで千人隊長は、「このことをわたしに知らせたとは、だれにも言うな」と命じて、若者を帰した。

最高法院でのパウロの取り調べは、復活を巡ってサドカイ派とファリサイ派の激論を呼び起こし大混乱になり、真相を究明することはできなかった。それどころか、両派の争いがパウロの身にさらに危険を及ぼし、千人隊長は兵舎に連れて行き、保護せざるを得なくなった。最高法院を混乱させ、千人隊長に保護させるパウロの思惑通りになった訳である。

一方、ユダヤ人たちの怒りはパウロ暗殺へと燃え上がった。40人以上の者たちが暗殺するまでは飲み食いを断つと誓い合った。彼らは祭司長たちや長老たちの所に行って、懇願した。パウロを暗殺するまで飲食を断つと固く誓った。だから、パウロを詳しく調べる口実を設け、最高法院と組んで、あなた方の所に連れて来るように、千人隊長に願い出てください。パウロが来る途中、殺す手はずを整えている、と。この陰謀を、パウロの姉妹の子が聞き込み、兵舎のパウロに伝えた。パウロは百人隊長を呼んで、この若者を千人隊長の所に連れて行ってくれ、何か知らせたいことがあるからと頼んだ。百人隊長はパウロの依頼を受け、千人隊長の所に若者を連れて行き、囚人パウロから、この若者を連れていくように頼まれましたと報告した。千人隊長は、パウロから遣わされた若者を人気のない所に連れて行き、「知らせたいことは何か」と尋ねた。若者は「ユダヤ人たちは、パウロのことをもっと詳しく調べるといふ口実で、明日パウロを最高法院に連れて来るようにと、あなたに願い出ることに決めています。どうか、彼らの言いなりにならないでください。彼らのうち四十人以上が、パウロを殺すまでは飲み食いしないと誓い、陰謀をたくらんでいるのです。そして、今その手はずを整えて、御承諾を待っているのです」と告げた。千人隊長は、「このことをわたしに知らせたとは、だれにも言うな」と命じて、若者を帰した。千人隊長はローマの市民権を持つパウロを守ることが重大な任務となったのである。